

五月、雨のあとのスカッととした澄んだ空気のなかに、子どもたちの声が吸い込まれていきそうな連休明け。

T 「お久しぶり、元気だった？」

にこりとうなずく子、後から体あたりしてくる子、そつとよってくる子、のぞきこんでくる子、おはよう」と大きな声で言いながら走り込んでくる子。青く晴れあがった空のようにどの子も張り切って登園してくる。九時から十時、子どもの動きと共に、時が遊びの時間を刻みはじめる。年長児には当番があり、朝は小鳥の世話から……他は思い思いのコーナーへ。ままごとの部屋には男子五名、丸テーブルの上に皿をならべて、色どりよくブロックをのせ、椅子をおき、おうちごっこがはじまる。

Y 「お客さまにきてください。」

と私を呼ぶ。

T 「はい、ありがとう。」

とYについてゆく。型通り挨拶がすみ、

T 「お父さまは誰？」

S 「僕だよ！」

M 「僕ごども(下の意味)」

Y 「僕はお兄さん」

H 「僕もお兄さん(小さな声)」

子どもの世界では体格と年齢に支配されるのが少ない。このグループで一番小さいYが一番上の兄、Mなど元気で体格も立派なのに赤ちゃんに近い存在の役割をしている。約十分ぐらい食卓での楽しい会話がはずみ、客が増えるたびにたりない椅子やご馳走と、女の子のままごとそっくりに展開してゆく。やがて

H 「うちには動物もいますよ」

と縫いぐるみのライオン、ねこ、くま等も仲間入りしてくる。

わたしも入りたかったのに

Y 「もう夜だから寝ましょう」

と布団を敷き、各々一匹ずつ動物を抱いてごろりと横になる。話をし、ふざけ、蒲団を出してしまった戸棚の中に大きなS₁が入りこむ。彼はその中で寝るつもりだったらしい。だがそれを見ていたHが、サッと扉を閉め、声はもたもたと、

「ちょっと我慢しててよ、かい、ぞう人間つくるから」

その声に皆一斉に動物をかかえてはね起き、僕も僕もと大変なさわぎ……。次ぎ次に、戸棚に入っては出て来る。

私は黙って部屋の隅にいる。そこへ庭の方から声がかかる。

C 「おだんごやさんです買いにきてください」「食堂もあります」

Y 「先生、動物は何のお金もついでいくの」

T 「そうね、葉っぱのお金はどうかしら」

S₂ 「うんそうだね、葉っぱがいいよ。おいしいもの食べてごよう」

土橋光子

ままごとにつかた葉を持って、動物を抱いてぞろぞろと庭の食堂へ。こんなことでつながりのできた遊びの輪に、あっという間に四十分程過ぎ、片づけの時間がくる。

「またあしたやろうね。これとっておこう」

等と話をはずませながら、全員で片づけがはじまった。その時である。つかつかと私の前に立ったM子、

「先生なんかはいつてなかったんだから」と凄じ剣幕でくってかかってきた。私はあつげにとられながらも、

「あら動物村の皆に買物にいらっしやいと言ってくれたのよ！」

M子「そんなことない！ はいっていません」

と二、三回のやりとりが続く。皆片づけに夢中で、交流のあった事を証明してくれる友だちがいなかったので途方に暮れていた時、案内に来てくれたCが

「どうしたの？」

とよってきてくれたので説明すると、あつざりと

「そうだよ、ちゃんと僕が言いにいって、はいったんだよ」

M子「そお！ それならいいわ、でも私はしらなかった!!」

まだ何となく怒っている感じ……。

保育が終った後教諭間で話しあった時、庭の食堂遊びの一員だった教諭が、

「あらM子ちゃん、はいっていませんかったのよ！」

これを聞いた私は、いったいどういう事だったのだろうと考え、答がでないまま翌日がきてしまった。この日は春の身体検査のある日で、グループがバラバラに呼ばれ

るので、まとまった遊びの発展に結びついてゆかない。動物村もメンバー不足、庭のままごとが始まっていない。M子も検査を終って出てくる。

「先生、今日は動物村しないの？」

このM子の問いかけに、急に昨日の迷いが私の心の中で霧散してゆく。M子もベツトに動物の縫いぐるみを抱いて、買物や散歩をしたかったのだろう。五月末の或る日、M子「あのねほんものの動物の赤ちゃんの大バザールがあるの！ いってね、犬のあかちゃんもらってくるの！」

教諭ベツタリだったM子も、年長組になってから少しずつ、ほんの少しずつ友だちの輪が広がっていく。待ってればわかるのに、なかなか来ない。すぐわかろうとしてあせる。でもやっぱりその場で理解してやれたら、どんなによかっただろうと、心の隅でまだ考えている。

(武蔵野相愛幼稚園)